

短編集 4
T r e e

久野那美

目次

機械 - 7 -

スイッチ - 14 -

時計 2001 - 23 -

ロケット - 29 -

わすれもの - 44 -

T r e e - 53 -

人形

登場人物 人形

もっと別の誰か

人形 あなたは人形なのだ、私に教えてくれた人がいました。
物語を正確に語り伝えるための人形。

誰かが昔、そういう人形を作ったんです。

どこかでみつけた「あったかもしれないこと」を、別の誰かに届けるために。
届くまで、大事にしまっておくために。

その人には、そういう人形を作らなければならない事情があったんです。

昔のことです。

それから、ずいぶん経ちました。

私を創った誰かは、ここにはもういません。

その誰かが物語を届けたいと思った誰かも、ここにはもういません。

今では誰も聞いていない物語を、私はひとりで繰り返します。

私には、終了するための仕組みがないので、語るのをやめることができないからです。

物語を語る人形に物語を語り終えるための仕組みを創ることを、誰も思いつかなかつたんです。大切なものを創る時にそれがなくなつたときのことを考えて創る人はいないからです。

私はきつと、とても大切なものを託されて創られたんです。

ですから。今も毎日、時間が来ると目をあけて、教えられた通りに物語を語ります。
誰に伝えるわけでもなく、繰り返し語るんです。

（人形が目をあける。）

* *

もっと別の誰か そんな人形が、どこかにいるのだそうだ。

どこにいるのか誰も知らないし、探してもみつからない。

けれども、何かのはずみにたまたま近くを通りかかって、どこからか漏れてくる物語

を耳にする人がいる。多くはそのまま聞き流して、通り過ぎて忘れてしまう。けれど、中に、ほんとうにわずかだけれど、自分のために創られた物語だと感じて立ち止まるひとがいる。

その物語がなぜそこでそうやって語られているのか、彼らは知らない。知らないし、どこで聞いたのかもきっとすぐに忘れてしまう。自分がみつけた、自分のための物語だと思っている。そして大切に持ち帰る。

「そうそう、こんな話があってね。」

そして、ある時ふと思い出す。誰かに話して聞かせたくなったとき。そんな物語があることを、誰かに知ってほしくなったとき。

自分がみつけた「あつたかもしれないこと」を、目の前の誰かに話して聞かせたくなったとき。

そうして、物語は別の誰かに手渡される。

人形はもちろんそのことを知らない。
ずっと同じところで、誰に向けることもなく、繰り返し、物語を語っている。

*** **

いつだったか、どこかで聞いた話なんだけれど。
なんだかふっと今思い出して。
話したくなって。

だから、

機械

登場するもの： 機械（新）

ひろみ

機械が働いている。
ので、機械音が響いている。規則的に。リズムカルに。

機械（新）

今日から仕事が始まった。新しい職場。
新入りではあるけれど、誰も僕にはかなわない。
これまで、誰にもできなかったことが僕にはできる。
いろんなことが新しくなる。
これまですけなかったことができるようになる。
これからは・・・

ひろみ ねえ。

機械（新）（無心に働いている）

ひろみ ねえ。

機械（新）（無心に働いている・・・つもりではあるが、ちよつとずつ乱れてきたりして・・・）
ひろみ 聞いているの？！

音が止まる

機械（新） なんでしょう。

ひろみ 返事した！

機械（新） ひろみさんが呼ぶから。

ひろみ ふうん。そんなこともできるんだ。

機械（新） 機械ですから。

ひろみ ふうん。

機械（新） 最新式の。

ひと はーん。まだきれいだもんねー。

機械（新） どうもありがとう。

ひろみ ほめてる訳じゃないわよ。最初は誰だっけまっさらよ。
機械（新）・・・で、何でしょう？

短編集 4

ひろみ べつに。何ってことはないけど。

機械(新)

ひろみ 退屈だしい。

機械(新)

ひろみ ちょっと気になったしい。

機械(新)

ひろみ ねえ。なにしてんの？

機械(新) 仕事です。

ひろみ はは、冗談も言うんだ。

機械(新) 言うときもありますが、今は違います。

ひろみ (あきらめて) 面白いひとね。

機械(新) 機械です。

ひろみ (ため息)

間

ひろみ あんたって、さあ、何の機械？

機械(新)

ひろみ いつからはたらいてんの？

機械(新) 今日からです。

ひろみ

機械(新) ええ。

ひろみ それじゃ、まだわかんないよね . . .

機械(新)

ひろみ 仕事、楽しい？

機械(新) はい。

ひろみ どのへんが最新式なの？

機械(新) 古い方たちのことはよく知らないんで詳しくは説明できませんが、

このこと、これからこのところがこうなってるのが従来の様式と

は違うそうです。

ひろみ ふうん。このこと、このこと、ほんとだ、へえ。こおんなふうになってるんだ。

機械(新) 特にこのところの技術開発には相当な苦労があったと聞いています。

ひろみ でしょうね。

機械(新) 「.ですから、もう、あんな事故は起こりません。」

短編集 4

ひろみ …… あんた知ってるの？

機械(新) 何をですか？

ひろみ …… あの、事故のこと…。

機械(新) 具体的には知りません。プログラムされてることしかわかりませんから。…ここまでは、聞かれたら答えるようにプログラムされてるんです。

ひろみ そう。(黙り込む)

機械(新) やっと時代が変わったんです。古い機械は一掃されます。

ひろみ そう。

機械(新) これまでの、たくさんの事故のデータを元にして僕は創られた。

あんなことが、もう二度と起こらないように。

……ひろみさん、

ひろみ 何よ。

機械(新) いえ…。

ひろみ じゃまして悪かったわね。

機械(新) いえ。

ひろみ 続けなさいよ。

機械(新) はあ。

機械(新) は仕事の準備をしている。

ひろみ …… あんた、なんで私の名前を知ってるの？

機械(新) ……そうですね。なんででしょう。

でも、ひろみさんに呼びかけられたらいったんストップするようにできてたみたいです。

ひろみ ……そして、さっきの話をするようになんてできてるわけね。

機械(新) ……はあ。そうなんでしょうか？

ひろみ そうよ。そしてあんたはまたスイッチをオンにする。

今度は私が呼んだって、もう返事したりなんかしない…。

誰に呼ばれたって。次にあんたが止まるのは…。

機械(新) 止まるのは？

ひろみ ないしょ。

機械(新) 意地悪しないでくださいよ。

ひろみ あんたにもわかるわよ。いつか。

機械(新) いつかって、いつなんです？

機械音。再開する。
規則的に。リズムカルに。

機械(新) ねえ。ひろみさん、事故って・・・？いったい何があったんです？

機械音。大きくなる。
規則的に。リズムカルに。

機械(新) ひろみさん・・・。(音の中に消えてしまう)

何かが壊れる音。

関係なく、機械音は続く。規則的に。リズムカルに・・・

スイッチ

登場するもの：男

女

静寂。やがて・・・
かちっ。

女 遠くで音がした。スイッチが切れた。

女 世界は反転し、あつという間に、動揺してざわめく人々でいっぱいになった。

男 おい、大丈夫か？

女 うん。

男 ……困ったな。

女 うん。

男 どうなってんだよ？

女 わかんない。

男 なんなんだ？
 女 わかんない。
 男 まいったな。
 女 どうなるの？これから
 男 俺に聞くなよ。
 女 だって。
 男 あーあ。(あたりを見回して)。
 女 ねえ。どうする？
 男 どうするって……どうするんだ？こういうときは。ふつう……
 女 こういう異常事態にはふつうはどうするものなのかを聞いているの？
 男 つっこむなよ。
 女 ごめん。
 男 見てこようか。
 女 どこを？
 男 スイッチ……
 女 どこにあるの？
 男 ……さあ。

女 もう一回つけられる？
 男 ……さあ。
 女 このままつかなかったらどうなるの？
 男 このままの状態が続くんだら。
 女 いつまで？
 男 いつまでも。
 女 そしたらどうなるの？
 男 俺に聞くなよ！
 女 だって……。
 男 とりあえず、ここを動かすな。落ち着いてゆっくり考えよう。
 女 そんな悠長なこと言っていないの？
 男 焦っても一緒だよ。なにかするまでなにもかわらないんだから。
 女 ……
 女 私たちはとりあえず、その場にどどまり、落ち着いてゆっくり考えることにした。
 考えてもなにも思いつかなかった。
 スイッチが切れたときのことを考えたことなんてなかったから。

なにも打つ手がないまま。時間だけが過ぎた。

男 なあ。
女 なに？何か思いついた？
男 いや・・・その・・・思いついたというか・・・
女 なんだ。
男 いや・・・ちょっと気になったことがあって。
女 なに？
男 あのさ・・・笑うなよ、・・・もしかしたら・・・、もし・・・
女 うん・・・
男 いや・・・そんなはずはないか。
女 なによ、言いかけてやめないでよ。
男 ・・・・いや・・・
女 言ってよ。気になるじゃない。
男 うん。
女 うん。
男 ・・・・スイッチの切れた音だったんだろうかと思って。

女 えええ？（笑う）
男 笑うなよ。
女 だって。
男 何で笑うんだよ。なにも可笑しくないじゃないか。
女 じゃ、なんで、さっきわらうなって言ったのよ？
男 笑うようなことじゃないからだよ。
女 笑うようなことじゃないのにわざわざ笑うなんて言わないでよ。まぎらわしいじゃない。
男 なにが？
女 そんなこと言うから、おかしいのかと思っただじゃない。
男 じゃあ泣くなっていいたら泣くのか？おまえはそんな相対的な根拠で可笑しいのか？
女 なに怒ってるのよ。
男 動揺してるんだよ。
女 じゃあ、あの音は何なの？この状態は何なの？これは幻なの？錯覚なの？
男 だから・・・あれは・・・
女 あれはなによ。

女 大丈夫よ。思いつくまでなにも変わらないんだから。

女 私たちは考えた。考えてもなにも思いつかなかった。

だからなにも変わらなかった。

長い長い時間が過ぎた。

世界はいつまでもそのままだった。

スイッチを入れなければいけないのか？切らなければいけないのか？

誰にもわからなかった。

あの音を境にすっかり反転してしまった世界に、私たちは少しずつすこしずつ慣れていった。

同時に古い記憶は少しずつ少しずつ薄くなり、やがてどこからもすっかり消えてしまった。

そうなるのに十分なだけの、長い長い時間がすぎた。

長い時間が過ぎたあと。

老女 私たちの世界が終わろうとしていた。

みんな静かに安らかに目を閉じ、おしまいの準備をしていた。
何かやりのこしたことがあるような気がしていた。
けれども、それが何なのか、誰も思い出すことができなかった。

静寂。やがて・・・

かちっ。

男 遠くで音がした。スイッチが切れた。

老女 世界は反転し、あっという間に、動揺してざわめく人々でいっぱいになった。
その中にはもう、私たちは、いなかった。

時計2001

登場するもの：時計

時計屋

時計 調子が悪くなったので、なおしてもらうことにした。
針の先がなんだか重いし、ねじのところはぎしぎし言うし。
ときどき息切れもする。
最近。時間が経つのが妙に遅くなったのは、きっと気のせいじゃない。
うすうす気づいてはいたんだけれど、認めるのが怖かった。
だけどついに、ごまかしきれなくなってしまうた。
修理に出かけることにした。

時計屋 (脈を取る) うーん。

時計 なんですか？

時計屋 うーん。

時計 はつきり言ってください。

時計屋 弱いなあ……。

時計 え？

時計屋 何年になる？

時計 はい？

時計屋 働き始めてから。

時計 あ……。ええと……。

時計屋 100年近いだろう。

時計 そんなになりますか……。

時計屋 うん。ほら見てごらん。ここのところ。すっかりすり切れてしまって……。

時計 ……自分では見えません。

時計屋 ああ。見ない方がいい。これはひどい……。

時計 そんなにひどいんですか？

時計屋 うん。

時計 時間かかりますか？

時計屋 時間かかっている。正直に言ってごらん。一日が36時間を越えてるはずだ。

時計 ……はあ……実はもうちょっと……。いえ、そうじゃなくて……。治るの

短編集 4

に、．．

時計屋 治る？無茶言っちゃいけない。

時計 え．．．？

時計屋 動いてるのが不思議なくらいだよ。

時計 不思議．．．

時計屋 隠してもしょうがない。率直に言おう。君の1日はこれからどんどん長くなる。今より短くなることはないし、どんなに手を尽くしても、正確に時を刻めるようにはもうならない。

時計 そんな．．．あの、

時計屋 部品を取り替えても同じだよ。

時計 ．．．

時計屋 時計屋にも、治せるものと治せないものがある。

時計 ．．．

時計屋 故障にも、治るものと治らないものがある。

時計 僕は．．．

時計屋 わたしが君にしてあげられることは何もないよ。

時計 ．．．じゃあ．．．

ぼーん、ぼーん、ぼーん。

時計屋 落ち着きなさい。今は8時だ。

時計 分かってます。まだこれ以上鳴らせません。

僕は今3時なんです。しかもこれからどんどん遅くなる．．．

かち、かち、かち、不整脈。

時計屋 そんなにあせるな。焦ると仕事にさしつかえるぞ。

時計 仕事って．．．

時計屋は後ろを、向いて、別の時計をなおし始めた。

時計 壊してください。

時計屋 え？

時計 せめてネジや文字盤になって、別の時計の役に立ちます。

時計屋 ばか言っちゃいけない。正しく動けない時計の部品がなんの役に立つ。

時計 ……。

時計屋 焼けをおこすのはやめなさい。冷静沈着に時を刻むのが君たちの仕事なんだから。

時計 冷静になったって、もう、僕には……………

時計屋 いろんなひとが、いろんな理由で時間を尋ねる。

時計はいつも冷静に、それに答えなくてはいけない。

君が時計であるかぎり、君が刻んでるのは時間なんだ。

ぼくは、まだ時計なんですか？

時計屋 だから壊すわけにはいかないんだよ。

時計

結局丸め込まれてしまった僕は、そのまま時計屋を後にした。

治ることも壊れることもできないまま、ひきつづき、時間を刻んだ。

かちかちと慣れた音をたてていると、少しずつ気持ちが落ち着いてきた。

時計屋の言ったとおり……………

こんな僕にも時間を尋ねるひとはいた。

数字の欠けた針のゆるんだ僕の文字盤を見ているひとがいつもいた。

そのひとたちは僕の刻む時間だけをじっと見ていた。

ぼくは息切れしそうになりながら、間違った時間をよろよろときざみ続けた。

1日は40時間になり、60時間になり、100時間になり……………

正しい時計ではどうしていはかることのできない長さになっていった。

僕が刻んでいるのはいったい何なのか、自分でもわからなくなってきた。

だけど、それでも。僕の時間を必死で見ている人がいつもいた。

治療のしようのない僕の針はどんどんすり切れて動かなくなり、

そしてある日完全に止まってしまった。

かち、かち、かち……………

静寂。

時計

驚いたことに。

それでも僕を見ているひとがいた。

止まってしまった僕の針は、「永遠」という時間を刻んでいた。

僕はまだ時計だった。

ロケット

登場するもの：男

女

しんと静まりかえった夜。
人里離れた山奥の道路を、車が1台走っている。
道路沿いの広い敷地に女がひとり、夜空を見上げている。
女の姿を見つけ、車は道を引き返して近づいてくる。
向かってくるヘッドライトを、女は吸い寄せられるように見つめている……。

男 あのこと…

女 ??

男 ルート117って、これですか？

女 ??

男 あのこと…

女 (呆然と、ヘッドライトをみつめている)

男、車から降りてくる。

女の近くに駆け寄って。

男 あのこと…

女 え？

男 ルート117って…

女 117？

男 この道行ったら、合流するはずなんですけど…

女 ……

男 いや、もうとっくに合流してるはずなんですけど…

女 ……？

男 ここまできてもまだ見えないということは…。あーあ。

女、ふと我に返った様子。

女 間違っています。

男 は？

女 どこかで間違っちゃったんですね。

男 ……はあ…

女 どうして、間違っちゃったんでしょね。

男 じゃあ、どっちへいけば…

女 さあ。

男 ええっ。ここは…

女 このあたりには117は走ってません。その道路はずいぶん遠くまでいかないと思います。

男 ええっ！

女 どこへ向かってたんですか？

男 いや、町へ…

女 (ため息) そうですよね。

男 え？

女 イブの夜にこんな真っ暗な山奥に用事のあるひとなんていませんから。

男 いや…

女 これでもね、いつもはもうちょっと明るいですよ。

男 そうでしょうね。太い道路が走ってるし、さっき着た道には大きな建物もありましたよ。

女 療養所です。

男 ああ。

女 そこも今夜は空っぽです。クリスマスの夜はみんなうちへ帰るから。

男 ああ。どうりで…

女 灯りがついてなかったでしょう。

男 ええ。

女 あなたの車は、私が今夜地上で見たはじめての灯りです。

男 ああ。

女 だからごめんなさい。ぼおっとしてて。まさか車が通るなんて思わなかったから、つい…、

男 え？

女 別の灯りかと思っちゃった。

男 ……誰か…ここで誰か待ってるんですか？

女 ……待ってたんですけど…。今回も駄目みたい。

男 え？

女 どうするんですか？

男 え？

女 これから。
男 どうしようかな。
女 急いでるんじゃないんですか？
男 いや。特に約束があるわけじゃないし。
女 ?
男 昨日まで仕事でろくに休みがとれなかったから・
女 なんのお仕事？
男 本を・・・科学の本を作ってるんです。
女 ふうん。
男 クリスマスの夜に用事もなし、ひとりで過ごすのも寂しいから、明るいとこへちよっと出てみるかと思っただけです。今日なら、町へ出ればどこも灯りが灯っていて、どこへ行ってもひとが集まっただけです。今日なら、町へ出ればどこも灯りが灯っているところへ行きたくなるじゃないですか。
女 そうですね・。
男 それが走れば走るほど真っ暗になってきて・・
女 すみません・・
男 え？いや・・だけど・・・

女 だけど？
男 道に迷ってちょっと得したこともあります。
女 え？
男 これだけ真っ暗だとずいぶんたくさん見えるんですね。
女 ・・・
男 星がこんなに明るいととは思わなかった。
女 ・・・
男 どうしました？
女 私・・・向いてないんですね・。
男 は？
女 失敗ばかりなんです。いつも。
男 あの・・
女 ごめんなさい。ちよっと落ち込んで。
男 そうでしょうね。
女 どうして？
男 だって、あんな暗い顔して空見てたから・・。
女 暗かったですか？

男 ええ。

女 よく、声かけられましたね。人気がない山奥の空き地で暗い顔で空を見上げてる私に・・

男 あわててたんです。そうじゃなかったら通り過ぎてます。

女 ・・道間違えたからですか？

男 そうです。

女 ・・・・間違えると落ち込みますよね・・。

間

男 あなたも・・道を間違えたんですか？

女 いいえ。私は。私が間違えたのは道じゃなくて・・。

男 はあ。

女 もう、嫌になるくらい長い間やってるのに・・

男 はあ。

女 もう、びっくりするほど、気が遠くなるほど、長いんです。

男 はあ・・。

女 なのに。にもかかわらず。また、おんなじ失敗をしたんです。

男 ・・・はあ・・

女 だから・・。

女、また悲しげに空を見上げる。男 もそれにならう。

男 あの・・何を間違えたんです？

女 内緒ですよ。落ち込んでるからつかつかかりしゃべっちゃいますけど、ほんとうは内緒なんです。

男 はい・・。

女 (ひそひそ) 特別なロケットを作って、打ち上げるんです。それが私の仕事です。

男 は？

女 明るく光るロケットを、空へ向けて。

男 それは、何ですか？宇宙開発かなにかの関係で・・？

女 さあ。開発の目的は私にはわかりません。それは私の仕事じゃないんです。私の仕事は、十分な明るさのカプセルを作って、決められた軌道に沿って打ち上げることなんです。

男 ……つまり、それが、うまくあがらなかったわけですね。

女 そんなにしょっちゅう失敗するんですか？

男 どうして？

女 わかりません。ちゃんと、軌道を計算して、それはもうものすごく綿密に計算して。

重さや、材質や、いろんなものを吟味して、風の強さや、気温も記録して。

慎重にタイミングもはかってとばすのに。

いつも途中まではちゃんと、その通りに進むのに、いつも途中から、わけのわからない理由でうまくいかなくなるんです。

高度な技術の開発には失敗は付き物ですよ。

女 ええ。でも……

男 いつも同じ失敗をするわけじゃないんでしょう？

女 いつも同じ失敗をするんです。

男 え？

女 だから落ち込んでるんです。

男 どうして？

女 わかりません。

男 いや……それはおかしい。

女 どうして？

男 失敗の原因を探して、そのたびにちゃんと解決してるんでしょう？

女 いいえ。

男 どうしてしないんです？それって科学の基本じゃないですか？！

女 わかっています。

男 じゃあ、どうして？

女 探すものが、ないからです。

男 ？

女 失敗したから、戻ってこないんです。

男 ……

女 飛んでいったきり、どうしてだか戻ってこないんです。いつも途中で行方不明になっちゃうんです。

男 ……

女 いったいどこで何を間違ったのか……

男 あのこと。

女 あんなにたくさん。失敗しなかったら、あれはみんなここにあったはずなのに……。

男 ……

女 そしたら、ここはもっとずっと明るくて。

あなたも道に迷ったりしなかったんでしょ。

男 ……

女 ごめんなさい。

男 それから彼女は空を見上げ、星を数え始めた。

それは星の数ほどあるわけだから、たっぶり一晩はかかりそうだった。

あれがみんなここにあったらどうなったろう、とふと思った。

イブの夜。町は色とりどりの灯りに包まれる。

町の灯りを反射して、夜空もうっすらと明るくなる。

空はほんのりかすんでそこには何も見えなくなる。

いや、十分に明るいところで、そもそも誰も空を見上げたりなんかしない。

ふと、去年の今日のことを想い出した。

空を見上げることなんて考えもしなかった。

明るいところへ行きたいとも思わなかった。

そこはとても暖かくて、とても明るかったから。

あのあと……どこで間違っただろう。

だけど、もう原因を探すものがない。

彼女は行ってしまった。もう、ここにはいないのだ。

もし、打ち上げられた灯りがみんな地上へ戻ってきたらどうなるんだろうかと思った。

そしたらここはどうなるんだろうかと思った。

いや。

失敗は、これからも延々とくりかえされるような気がした。

原因を探し出して、解決するのが科学だ。

原因のわからないものは解決しない。それも科学だ。

これからも、ロケットはどんどん打ち上げられ、空の灯りはそのたびにひとつずつふ

えていくのだ。とても科学的な理由で……。それはちょっと素敵な想像だった。

僕は車に戻り、来た道に戻ることにした。

真っ暗で手がかりのない道を。

自分がどこを走っているのか、朝がくるまでわからないだろう。

朝日が昇るころ、僕はどこへ続く道をどっちの方向へ走っているだろう？

シートに座り、ギアを入れ、窓からふと見ると。

ロケットの彼女は、まだ星を数えていた。

わすれもの

登場するもの 男・少年

少女

男 どこかへ何かを取りに戻らなければならぬような気がして。

波の音を頼りにやってくる。

たとえばこんな夏の海辺に。

焼けた熱い砂。水しぶき、大人や子供の甲高い笑い声……。

目の前の風景を手がかりにして記憶をたぐると、
なくしてしまった、決して思い出せない何かの代わりに
奇妙なほどに正確な、偽物の風景にたどり着く。

照りつける太陽。

ざくざくざく……。

子供たちのざわめきを背に波打ち際を歩く音……。

少年 足の裏が焼けそうに熱かった。

ざく、ざく、ざく…

少年 立ち止まると、じゅうつと音をたててかかとかから溶けてしまっそうだった。

ざく、ざく、ざく…

少年 右、熱っ、左、熱っ右…二本の足は交代に奇妙なりズムで砂を踏んでいた。

ざく、ざく、ざく…

少年 だから、いつのまにか、もうひとつの足音が後ろから聞こえてきているのに、全然気がつかなかった。

足音、もうひとつ。

少年 そのままだれくらい歩いたんだろう。後ろからの笑い声に、ふと振り返ると。
(たち止まって振り返る)

少年 そいつはこっちを見てわらっていた。

砂浜にふたり、向き合って立っている。

少女 (笑っている)

少年 何だよ。

少女 あー。見つかっちゃった。

少年 ……なんでついてくんのか？

少女 ……なんででしょう。

少年 ……誰？

少女 ……誰でしょう。

少年 ……。

少年、再び歩き始める。

少女、あとを追う。

少女 (楽しそうに) ねえ。

短編集 4

少年 (無視して歩いている)
 少女 怒らなくてもいいじゃない。
 少年 (無視して歩いている)
 少女 ねえ。
 少年 (無視して歩いている)
 少女 ねえったら。
 少年 うるさい! あっちいけよ。
 少女 ・ ・ ・ 一緒に探してあげる。
 少年 え? (一瞬止まる)
 少女 靴。
 少年 ・ ・ ・
 少女 靴、なくしたんですよ。(笑っている)
 少年 ・ ・ ・ なんで?
 少女 だって裸足で歩いてるもの。
 少年 ・ ・ ・
 少女 ねえ。どんな靴?
 少年 なくしてなんか・ ・

少女 ・ ・ ・ じゃあ、なんで裸足で歩いてるの?
 少年 ・ ・ ・
 少女 熱いでしょ。
 少年 別に。
 少女 ふうん。
 少年、足ぶみしている。
 少女 ねえ。どんな靴?
 少年、無視して歩き出す。
 少女 ねえ。(ついてくる)
 少年 (無視してどんどん歩く。)
 少女 大きさは? 色は? 形は?
 少年 (無視してどんどん歩く)
 少女 どうしてその靴を履いてきたの?
 少年 (一瞬立ち止まる)

少女 ねえ。どこで脱いだの？
少年 ……
少女 どうして、
少年 うるさいなあ。いって。このまま帰るから。
少女 ……どうして？
少年 いいんだよ。もう。

少年、ざくざくと歩き始める。

少女は立ち止まったまま。

ひとつになった足音に気づいて少年、ふと立ち止まる

少女 ……履いてきた靴は、履いて帰らなくちゃ。
少年 しょうがないだろ、みつからないんだから。
少女 ちゃんと探した？
少年 探したよ。
少女 嘘よ。
少年 なんて？
少女 だって…

大きな波がうち寄せる。

少年 ……何？
少女 みんなそう言う。
少年 みんな？
少女 みんなそうやって裸足で帰る。
少年 ……？
少女 だから…。
少年 何が…
少女 ほんとは捨てに来たんじゃないの？
少年 んなわけないだろ。
少女 じゃあ、どうして？
少年 え？
少女 どうして困らないの？
少年 困ってるよ。
少女 どうして誰も探しにこないの？

少年 探したってみつからないから。

少女 みつかったら？

少年 え？

少女 もし・・・みつかったら？

少年 みつかったら履いて帰るよ。

少女 みつからなかったら履いて帰らない。

少年 ・・・。

少女 来るときは裸足でこない。

少年 そりゃそうだよ。

少女 みつかっても、誰も取りにこない・・・。

少年 ・・・。

少年 太陽は真上からじりじりと地面を焼いていた。

靴を履かない裸足の足で、僕はそれ以上立っていることができなかった。

彼女に背を向けて、ざくざくと歩いた。

気がつくとは後ろからはもう、足音は聞こえてこなかった。

声の届かない距離まで歩いて、ふと、後ろを振り返った。

赤い運動靴が片方だけ、
上を向いたまま波に運ばれていくところだった。

Tree

登場するもの：声

男

マツチ売り

声

森の中に。2本の大きな木がありました。

2本の木はお互い、隣に立っているもう一本の木のことがとても気になっていたのですが、根元からしっかり地面に固定されていましたから、一歩でも近づくことはできませんでした。

枝が触れあうにも少し距離がありすぎるのでした。

ですから2本の木は並んで立って。一緒に太陽の光を受けていました。同じ風に吹かれ、同じ雨に打たれ、同じように葉を茂らせていました。

何百年もの間。2本の木はそうして一緒に立っていました。

あるとき。木は切り倒されて運ばれていくことになりました。

森が開発されることになったのです。

1本目の木が切り倒されました。

2本目の木も切り倒されました。

ばらばらに放り出された木が見た森は、それまでと全然違う森でした。

もう1本の木の姿も、それまでとは全く違って見えました。

最初に切り倒された木は、次に切り倒された木に言いました。

「一緒に日の光を浴びることも、一緒に葉を落とすことも、一緒に実をつけることも、できなくなってしまう。できないし、どうしてだか、今はもう、そうしたいとも思わない。」

…2本目の木も、同じことを考えていました。

「また、どこかで会うことがあるだろうか。」木は続けて言いました。

「もう一緒にはいられないけど、もしもまた。いつか。どこかでもういちど会うことができたら…。そのときは、そう…。」

こういうときに言う言葉があったような気がしました。

これまで、使うことができなかつたので忘れていたのですが…。

そう、…木は続けて言いました。

「一緒になろう…。」

言っではみたものの。どうということなのか、よくわかりませんでした。

言われた方の木にも全然わかりませんでした、でも、なんだか満足して。なんだかとても満足して。2本の木は頷き合いました。まもなく。

切り倒された2本の木は、それぞれ別のところへと運ばれていきました。森はきれいに整備され、あとには遊園地が出来ました。

森の奥で交わされた小さな約束のことを、知っている人は誰もいませんでした。

* *

12月24日。夕暮れの近づく遊園地。にぎやかに人が行き交う中、男が一人。ベンチに座って観覧車を見上げている。

男 来ないよな。やっぱり。

男、たばこに火を付けようと、ライターを擦る。しゅっ。しゅっ。

ガスが切れてるのか、炎が上がらない。

男 ちえっ。

(男)「いつかもし。またどこかで会うことがあったら…。」

あいつは最後にそう言った。

会うことがあったら…？

何を言いたかったのか。

結局分らないまま、夏が過ぎ、秋が過ぎ、冬がやってきた。

はじめて会ったのは冬だった。

観覧車に乗った。

次の年も。その次の年も。その次も、次も、次も…。

観覧車の窓から見る山は、毎年少しずつ崩されて。大きな町になっていった。

観覧車の窓から見る海は毎年少しずつ埋め立てられて、陸の形を変えていった。

考えてみたら。なんで毎年毎年毎年。

おんなじところでおんなじことしてたんだろ。…そんなふうに、初めて思った。

男 「…変わっていったのは、海と山だけではありませんでした…。」
わかってる。のに俺、何しに来たんだろ。

男はぼんやりと眺めている。
メイン会場は向こうにあるらしく、
親子連れやカップルが足早に通り過ぎていく。
やがて。
コスチュームをつけたマッチ売りがひとり、バスケットを下げて近づいて来た。

マッチ売り マッチはいりませんか？
男 …え？
マッチ売り …マッチ、いりませんか？
男 マッチ？
マッチ売り はい。
男 ……………どうして？
マッチ売り マッチ売りなんです。
男 マッチ売り？
マッチ売り (小声で) 本物じゃないんだけど。 クリスマスのイベントなんです。
男 …サンタは？
マッチ売り サンタの方がいいですか？
男 いや…

マッチ売り 家族連れやお二人連れのお客様にはサンタが向こうでプレゼントを配っています。 マッチ売りは…それ以外のお客様のために、こうやってマッチを配るんです。

男 ……はあ。
マッチ売り この遊園地のオリジナル。

男、しばらく考えている

男 俺はマッチか…………。
マッチ売り ……そんな嫌な顔しないで下さい。
男 いや…。
マッチ売り サンタはどこでも会えるでしょ。
男 ……。
マッチ売り お客様…。 去年も、来てませんでした？ なんだか…。
男 来てたよ。 去年もおととしも、その前も、その前も…。
マッチ売り そんなに、来てたんですか。
男 どうせ、俺は芸がないよ。

短編集 4

マッチ売り え？
男 おなじことしかできないよ。
マッチ売り いえ…。
男 そういうのがよかったんだよ。
マッチ売り …。
男 でも、同じじゃなかった。
マッチ売り …。
男 ……同じじゃない。今年は君に会ったから。
マッチ売り ……そんな風に（言わなくても…）…。
男 アルバイト？
マッチ売り ……はい。
男 長いの？
マッチ売り 3年目です。
男 ふうん。全然知らなかった。
マッチ売り …。
男 サンタには毎年会ったけど。
マッチ売り ……すみません。

男 なんで、こんな日に仕事してんの？
マッチ売り ……（しばらく黙っている）
男 いや……ごめん。

妙な間。

男 いくら？
マッチ売り え？
男 マッチ。
マッチ売り ……ああ…。いえ。今日はただで配ってるんです。
男 え、でもマッチ売り…。
マッチ売り 一応、そうなんですけど。
男 ふうん。じゃ、ひと箱。
マッチ売り はい。（マッチを手渡す）

シッ。男、マッチを擦る。軸の先に炎…。

マッチ売り いいマッチでしょ。（軸の先の炎を見ている）

男 これだけ？
マッチ売り え？
男 なんか出ないの？
マッチ売り なんか？…鳩とか？
男 七面鳥とか、ツリーとか。
マッチ売り 七面鳥とかツリー…。…今ほしいのは、七面鳥とかツリーとかですか？
男 ……。
マッチ売り あ…。
男 じゃあ、どうすんの？マッチ擦って、それで…。
マッチ売り だから。暖まったり、火を眺めたり、いらぬものを燃やしたり。
男 ……。

遊園地の雑踏。親子連れが通り過ぎる。
男、何気なくそちらに目を遣る…

マッチ売り 誰か、待ってるんですか？
男 ……待ってると思ったらマッチ売りに来ないでしょ。

マッチ売り ……。
男 暖まったり、眺めたり、燃やしたり…。
マッチ売り ……。

男、考えているが、ポケットから手紙を取り出す。
しばらく見ている…。

男 火つけてくれない？これに…。
マッチ売り なんですか？それ…
男 ……。
マッチ売り ずいぶん。くしゃくしゃになってますね。
男 ……。
マッチ売り 薄くて綺麗な紙なのに…。
男 ……。
マッチ売り 何か、書いてある。
男 ……。
マッチ売り ……手紙…？それは…

男 火、つけてくれないかな、これに。

マッチ売り、しばらく見ているが…

マッチ売り もらった手紙……………。出せなかった手紙……………。

男 え？

マッチ売り 燃やされるのはどっちかな…。

男 (何か言いかける)

マッチ売り (…が、遮られる) ずいぶん、古い紙。でも綺麗な紙。

男 ……………プロポーズ、しようと思ってた。(ふてくされてる?)

マッチ売り え？

男 今年。今日…。ここで会ったら…。

マッチ売り ふうん。

男 だけど……………。

マッチ売り ……だけど、「今年はまだ会えなかった。」

男 だけど…

マッチ売り だけど、「来てみたら会えるかも知れないと思った。」

男 ……………女々しい？

マッチ売り うーん。

男 未練がましい？

マッチ売り うーん。

男 でも、会えなかった。

マッチ売り ……。

男 あたりまえか。

マッチ売り、マッチを擦る。手紙に火をつける…

男 え！…あっあー…。(あわてている)

マッチ売り 火。つけちゃってよかったんですね。(落ち着いている)

男 ……ああ…う…うん…。(観念して見守っている)

マッチ売り 薄いから。燃えやすいですね。

男 ……。

マッチ売り、手紙を地面に落とす。
炎がゆっくりと縁を焦がしていく。

マッチ売り くしゃくしゃだから、さらに燃えやすいです。
男 ……

マッチ売り ……綺麗ですね。

男 ……うん。

マッチ売り 風つよいのに。

男 ……

マッチ売り 火…消えませんか。

男 ……

マッチ売り さすが、いいマッチですね。

男 火が消えないのはマッチのせい？

マッチ売り、燃えている紙を見ている。

マッチ売り ……紙のせいかな？

男 ……

マッチ売り 薄くてくしゃくしゃの紙だから。

ふたり、しばらく燃えるのを見ている。
小さな炎。白い煙が静かに空へ上がっていく。
ふたりは炎と煙を見つめたまま。

マッチ売り けっこうあったかいですね。

男 ……あ…うん。

マッチ売り マッチ一本でも火ですからね。侮れませんよ。

男 ……

マッチ売り そんなにじいっと見てなくても…。

男 ……

マッチ売り ……プロポーズ、ほんとにしようと思ってました？

男 え？（動揺している）

マッチ売り いえ…。

男 思ってた。（きっぱりと）

マッチ売り ……じゃあ、なんで去年じゃなかったの？

男 え？

マッチ売り じゃあなんでおとしじゃなかったの？

間

男 それは…。

マッチ売り ごめんなさい。越権行為です。私はマッチ売りでした。

男 いや…。

マッチ売り しかもアルバイトです。

間

マッチ売り まだ3年目。

男 …。

マッチ売り 燃やすものは、これだけですか？

男 …

マッチ売り マッチ、役に立って嬉しいです。

遊園地の雑踏は少しずつ静かになる。

マッチ売り ずいぶん煙出てますね…、

男 ああ。

マッチ売り しばらくこのまま置いときましょうか。

男 …うん。

マッチ売り 乗らないんですか？観覧車。

男 え？。

マッチ売り さっきからずっと見てるから…。

男 …

マッチ売り ここで待っても、もう誰も来ませんよ。きっと…。

男 ……うん…。

マッチ売り ここで待っても…。

男、煙が上がっていくのをぼんやりと見ている。
薄暗くなってきた。

向こうの方では灯りがともし、にぎやかな音楽も聞こえている。

このあたりはもう、通りかかるひとでもない…。

遊園地の雑踏は少しずつ遠ざかり…遠くから、物語が聞こえてくる。

声 最初に倒された1本目の木は、やがてマッチ棒になりました。

あとで倒された2本目の木は、上質のバルブになりました。
森の奥、並んで太陽の光を浴びていた2本の木は、お互いの姿を見ることもない、
別々の世界で暮らすことになりました。

森の中でのことは、遠い昔のできごとでした。

気の遠くなるような長い時間が、それから過ぎていったのです。

ある年のクリスマスの日。

マツチ棒になった1本目の木とバルブになった2本目の木は、

小さな炎の向こうに、再び相手の姿を見つけました。

次の瞬間。

小さな炎からは、香ばしい白い煙が上がりました。

白い煙は、冷たい空気の中を、ゆっくりと空高くのぼっていききました。

どこへ届くこともなく。ただ、どこまでものぼっていききました。

何をどこへ運んでいこうとしているのかわかりませんでした。

誰かがじっとこちらを見つめているのにも、全く気付きませんでした。

そんなことを考える間もなく。

マツチ棒とバルブは端からどんどん白い煙になって。

静かに空高くのぼっていったのです。

短編集 4 Tree

二〇一六年一月七日初版第一刷行

著者 久野那美

発行者 久野那美

nami.sparrow@gmail.com

※上演に関するお問い合わせは右記まで。